

# 日産プレジデント基金 ～被災地の子どもたちに笑顔を～ Newsletter

VOL.2  
2013.9



日産プレジデント基金は、日産自動車株式会社社長カルロス・ゴーン氏が発起人となって募った寄付金を活用し、東日本大震災で被災した子どもたちの笑顔を取り戻すためのプログラムを、日本NPOセンターが多分野のNPO、児童館、学童保育と連携し、実施するものです。あそびプラスOneプログラムでは、子どもたちの日常的なあそびの拠点である児童館に、多様な専門性を持った県内外のNPOが訪問してプログラムを提供しています。おでかけプログラムでは、被災してから、自由に外で遊ぶことが制限されたり、フィールドに出る機会が激減している子どもたちに、長期の休暇を活用して、フィールドに出かけ、さまざまな学習や体験、あそびを通じて、元気に過ごせる時間を提供しています。



## あそびプラスOne プログラム



# 身近な素材でつくって遊ぼう

Kid's プロ美郷・Kid's プロ金谷川／特定非営利活動法人みやぎ・せんだい子どもの丘

2013年8月9日、福島市松川町の学童保育Kid'sプロ美郷には、小学1年生から6年生までの27名が集まり、封筒を使った動くおもちゃづくりをしました。

放課後児童指導員の高荒さんは「放射線の影響で、子どもたちの外あそびは制限され、屋外の遊具も全て撤去せざるを得なくなっています。ここの子どもたちはモノづくりも好きなので、室内でできるあそびを充実させたい」と、連携先を選んだ背景を教えてくださいました。



ブルーの壁に赤い屋根のKid'sプロ美郷に、「笑顔バス」がやってきました。北九州市の幼稚園から譲り受けたバスは、宮城県名取市の仮設住宅の子どもたちが、全身ペンキだらけになりながら描いた絵で埋めつくされています。笑顔バスは、被災地を巡回して、子どもたちがピカピカの笑顔になれる楽しいプログラムを届けています。

この日、笑顔バスには、みやぎ・せんだい子どもの丘スタッフのぶんぞうさん、おいなりちゃん、ぺんぎんちゃんの3人が、色彩豊かな文具を積んでやってきました。3人が2階で準備を始めると、1階のプレイルームで遊んでいた子どもたちが待ちきれない様子で小窓から覗きにきます。この日のプログラムは「封筒人形」づくりです。茶封筒にあげられた丸や四角の穴からいろいろなものを連想し、割り箸や色紙を使って工夫を凝らしたおもちゃをつくっていきます。

最初に、おいなりちゃんが、これまでの作品を紹介しながら、子どもたちの自由な発想をどんどん引き出していきます。子どもたちは、大笑いしながら説明を聞いた後に、自分の作品づくりに取り組みました。ていねいに1つの作品を完成させる子、次から次へと作品を生み出す子など、さまざまです。男の子の多くは封筒の中に入れるものから作り、女の子は封筒に絵を描くことから始めるという違いも見られます。

みんなの作品が完成したところで、一人ひとりがおいなりちゃんと一緒に作品を発表しました。チョコレートを食べさせると虫歯になる、空だった水槽に金魚が泳ぐようになる、地球温暖化が進み人類がロケットで脱出する、月夜に人間が狼男になる、泣いているうさぎにニンジンを食べさせると笑顔になるなど…さまざまな物語が編み出されました。

子どもたちを巻き込み、表現力を引き出すプログラムに、子どもたちも、指導員さんたちも笑顔になれた2時間でした。



### 特定非営利活動法人 みやぎ・せんだい子どもの丘

子どもと子どもにかかわる大人に対して、人と人が出会いながら多様な体験ができる場を提供することを通じて、子育て支援や地域での健全育成活動を行う団体です。あそびプラスOneプログラムでは、クラフトやあそびうたコンサート、人形劇など、多様な表現活動のメニューの中から児童館のニーズにあったものを届けています。



# 福島っ子サマーキャンプ 2013

小国からの笑顔

5回目を迎える福島っ子キャンプは、小学1年～中学2年45名、幼児2名、高校生1名、保護者5名が参加して、2013年8月4日～18日までの15日間にわたり、愛知県北設楽郡東栄町、岐阜県高山市、中津川市加子母の3つの地域で実施されました。

代表の大波さんは「スタッフの多くは大学生なのに、子どもたちと正面から向き合い、ただ遊ぶだけでなく、一緒に泣いたり、笑ったり、語ったり、愛情たっぷりに接してくれます。子どもたちがやりたいこと、学生さんたちの思い、保護者の考えの接点を探りながら、よりよいこれからを一緒に作りあげていきたい」と語っていました。

## おでかけ プログラム



取材におじゃましたのは、キャンプ終盤の8月16日、17日の2日間。加子母のバンガロー村に到着すると、子どもたちが宿題をしたり、万華鏡をつくりたり、ゆったりとした時間が流れていました。辺りには、お昼に子どもたちが班ごとに作ったオリジナルカレーのいい香りが残っていました。

夕方には、地域の方々をお招きした「ありがとう！加子母祭り」が行われました。子どもたちが屋台の売り子になり、焼きそば、フランクフルト、焼きトウモロコシ、フライドポテト、チュロスなどを大きな声で宣伝していました。また、スタッフが考えたゲームコーナーもあり、売り子当番を終えた子どもたちも地元中学生と一緒にゲームを楽しんでいました。お祭りの最後には、キャンプのテーマソングで、みんなで輪になって盆踊り。自然の中で音楽を聴き、リズムに合わせながら踊っている子どもたち、スタッフ、そしてお母さんたちには、満面の笑みが広がっていききました。

翌日の午前中は子どもたちが大好きな駄菓子屋さんが開店。子どもたちは、帰りのバスの分まで考えてお菓子を買いました。その後は、バンガロー村に感謝の気持ちを込めて大掃除。午後には、予定にはなかった川あそびにでかけました。子どもたちはスタッフに水をかけたり、魚を捕まえたり、水の流れに乗って泳いだり楽しんでいました。

キャンプでは、子どもたちが自然の中で思いっきり遊び、野菜の収穫、天体観測、プロ野球観戦、

伝統文化体験など普段できないような活動が盛りだくさんです。人気の活動は、川あそびと運動会。でも、それだけでなく、宿題、洗濯、掃除、挨拶など、普段の生活も大切にしています。キャンプは、受入地域の住民、子どもたちが安心して食べられる食材を提供してくれる農協や漁協、NPOなどの共感と協力を得て運営されています。

子どもたちには、震災と原発事故以降2年半が過ぎ、自然の中で思いっきり遊ぶことなど子どもらしい生活が制限されてきた背景があります。そのストレスから、お友だちとのケンカが増えたり、無気力になったり、生活習慣の乱れが見られるなど、それぞれの子どもが抱える悩みが出てくるそうです。

お母さんたちは「そんな時、スタッフは子どもたちと真剣に話し合い、いつも寄り添ってくれていました。日に日に笑顔が増えたり、挨拶ができるようになってきたり、元気になっていくのが本当に嬉しかったです」と語っていました。



### おくに えがお 小国からの笑顔

福島県伊達市霊山町小国地区の保護者たちが中心となり立ち上げた団体。福島県全域の小学生を対象とする保養キャンプを、夏季と冬季の年2回、放射線量の低い地域で、愛知県内の復興支援団体「愛子カラ」と共催してきました。また、母子のリフレッシュや母親同士のネットワークを図るママサロンも運営しています。



## 東日本大震災における避難者の状況 ～子育て世代の地域を越えたつながり～

東日本大震災支援全国ネットワーク (JCN) 広域避難者支援担当 津賀 高幸

東日本大震災において、自県を離れて避難している人は、岩手県、宮城県、福島県だけで約61,000人<sup>※1</sup>、そのほかの地域から避難されている方もおり、その数は10万人とも言われています。避難の理由は、地震や津波で自宅を失くされる、放射線量が高いために住むことが制限されている、住むことの制限はされていないものの放射線量に不安を感じるなど様々です。

特に震災直後は、各地で「近隣の放射線量や水や食べ物が気になる」という声が聞かれました。みなさんの中にも、特に小さなお子さんがいらっしゃる家庭では気を使われていたのではないのでしょうか。そういった子どもへの影響を考えて、お母さんと子どもだけで避難している人も多く、家族が離ればなれでの暮らしが、震災から2年半経った今も続いています。避難者の問題は、お子さんをお持ちの家庭、子育ての世代の問題と言うこともできるでしょう。

震災後は、各地で避難されている方々の受け入れが進められ、民間団体の支援も行われてきました。日用品などの物資提供、避難者同士が話し合う「交流会・サロン活動」、母子避難者をサポートする「子育て支援」、住んでいるまちの情報を届ける「情報支援」など様々です。東日本大震災支援全国ネットワーク (JCN) では、全国各地で、広域避難者を支援する民間団体の情報交換の場をつくってきました。

こうした情報交換の場づくりを進める中で、広域避難者を支援する団体には、震災前から子育て支援などの活動をしていた団体だけではなく、各地域で避難者同士が支えあう「自助グループ」が生まれていることがわかってきました。この「自助グループ」の中には、それぞれの暮らしの支えあいのみならず、放射能の影響が気になりながらも地元で暮らしている子どもたちとその家族を応援しようと、一時的に子どもたちの受け入れをサポートしているところもあります。

そうした避難者が自らつながり、支えあうことも進んでいます。例えば、愛媛県に避難された方で設立した「特定非営利活動法人えひめ311」は、同じ四国内の「えんじょいと香美」や「福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト」<sup>※2</sup>をサポートしています。また、放射線量が高い地域の家庭に野菜を定期的に送るなどの、地域を超えた支えあいもあるようです。

このような活動に関わっている人の多くは、東日本大震災以降にはじめて市民活動に関わったといえます。試行錯誤しながら「子どもたちのために」という思いのもと、地域を越えたつながりや支えあいが徐々に広がっています。

※1 2013年8月22日現在、復興庁公表資料

※2 「えんじょいと香美」「福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト」とともに、日産プレジデント基金「おでかけプログラム」実施団体

表紙の写真提供: Kid'sプロ美郷、愛子カラ、えんじょいと香美

編集・発行:



認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター  
〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-2-1 新大手町ビル 245  
TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856  
Email jncenter@jnpoc.ne.jp  
URL <http://www.jnpoc.ne.jp/>  
Twitter jnpoc

制作: 一般社団法人経団連事業サービス